

曉千鳥西天の星荷ひ翔ぶ

春昼の鳩いっせいに低くとぶ

元寇の石を棲み家に春の蟹

青大将泳ぐはがねの首をたて

忌の家に羽蟻はげしく舞ひにける

雨の日の背振連山羽蟻とぶ

万緑や牛一頭を売りに行く

火の音を天に燃やして向日葵立つ

唾蟬のいきほいつかむ宙の端

爺逝きぬ夏野に白き杖ついて

海だけが見ゆる葬送夏の果

秋風に言葉返らず百羅漢

秋風や風のうしろに誰もゐぬ

秋風や非才の吾を持ち歩く

秋風やただにましろき予感あり

十月の鳥をこぼして阿蘇の天

水落つる一寸先や秋日散る

晩秋の駅煙草吸ふ間の停車

石に彫り雪の貌皆泣き笑ふ

野ざらしの果ての曼荼羅根より凍つ

祇王寺の結界の冷え底知れず

暮れ早し千の影伸ぶ念仏寺

田原坂昨日が見ゆる枯野越え

大動脈弁閉鎖不全症といふ寒さ

焚火の秀己が高きを吹きさらす

流転といふことばは悲し人の春

春昼の祈りとなりて火の燃ゆる

爆心地鳩春秋の目をひらく

ありし日の名を呼び酔へり鳥雲に

四月尽雨に朱を増す土器の片

轉りを天に石室開かるる

南風の鳴りつつ現るる大干潟

緑陰の甕に夕べの水満たす

雲峰を離るまひまひひきつれて

都府楼跡がらんどうなり梅雨しぶく

大梅雨の裾野を紺に降りつつむ

雷一閃産屋に青き火を焚けり

重力のきはみを燕翻へり

緑陰にハンケチを延べリルケ読む

その人の音沙汰なくて梅雨きざす

山を描く人に新緑滴り落つ

惜春のいたづらに野を駈けしのみ